

【 114 】

氏名	吉 鷹 輝 仁
授与した学位	博 士
専攻分野の名称	医 学
学位授与番号	博甲第 2271号
学位授与の日付	平成13年9月30日
学位授与の要件	医学研究科外科系整形外科学専攻 (学位規則第5条第1項該当)
学位論文題目	Long-term Follow-up of Congenital Subluxation of the Hip (先天性股関節亜脱臼の長期成績)
論文審査委員	教授 清野 佳紀 教授 平木 祥夫 教授 村上 宅郎

## 学 位 論 文 内 容 の 要 旨

先天性股関節疾患のうち、股関節亜脱臼はこれまであまり注目を集めてこなかった。今回、本研究では 1963 から 1980 年まで当科において保存的治療を行った先天性股関節亜脱臼 229 例 263 股（追跡調査率 53.1%）を対象に、レ線学的評価を行い、長期成績を検討した。初診時における亜脱臼の診断には石田のレ線学的診断基準を用い、最終調査時の評価には Severin の分類、骨頭壊死の存在には Kalamchi&MacEwen の分類を用いて行った。Severin 分類で 1,2 群を成績良好群、3,4 群を不良群とすると、26.3%が成績不良群に属した。骨頭壊死は 4.6%に認められた。最終成績不良群に属する股関節は幼時期より最終成績良好群よりも臼蓋発育が有意に遅延していた。また、片側罹患例において、罹患股関節と非罹患股関節は最終調査時、臼蓋形成の程度が関連していた。長期成績を検討した結果、先天性股関節亜脱臼は必ずしも予後良好な疾患ではなく、本疾患に対しても股関節脱臼と同様、特に幼時期において臼蓋形成不全を認める例に対しては、長期的経過観察が必要と考えた。

## 論 文 審 査 結 果 の 要 旨

本研究は、これまで報告例の少なかった先天性股関節亜脱臼（Congenital Subluxation of the Hip, 以下CSH）について研究を行ったものであり、その長期成績を検討した結果、26.3%が成績不良と判定された。CSHは先天性股関節脱臼よりも軽症であるとの見方が一般的であったが、漠然と考えられているよりも長期成績は不良であった。また、3～6歳の時期に一定の予後判定が可能と考えられた。これらのことから、CSHにおいても特に、幼児期に骨盤の成長が不良傾向を示す症例については、股関節脱臼と同様、少なくとも骨格の成長が終了する時期までは注意深い経過観察の必要性が認められた。この結果は価値ある業績である。

よって、本研究者は博士（医学）の学位を得る資格があると認める。